

## II-B-2

SLEに対する長期漢方治療（主として  
滋陰降火湯）の免疫応答系に与える影響

兵庫県立東洋医学研究所

○田 恩江, 奥川 斉, 曾 炳文, 清水 和彦, 松川 義純, 長瀬 千秋, 松本 克彦

【目的】全身性エリテマトーデス（SLE）は代表的な自己免疫疾患で、自己抗体の産生と免疫複合体の組織沈着による炎症性組織障害が認められる原因不明の難病である。SLEに対する治療法を確立することは、現代の医療にとって重要な課題である。一方、SLEに対する漢方治療の効果と免疫応答系に与える影響については、いまだ十分に明らかにされてはいない。そこで我々は、SLEに対する漢方治療（主として滋陰降火湯）の長期効果と免疫応答系に与える影響について、末梢血のリンパ球サブセットと抗DNA抗体価およびSLE活動性判定基準を指標として検討を行った。

【対象および方法】1. 対象：SLE群は34例すべて女性で、平均39.3歳。健常者群は、健康な成人女性10名、平均39.6歳であった。2. 方法：リンパ球表面抗原の解析はフローサイトメトリー法（FACScan System, Becton - Dickinson）でLeuシリーズ・モノクローナル抗体を用い、測定値としては各サブセットの百分率を用いた。

【結果】SLE群（ $n = 34$ ）のTi（ $CD4^+$ ,  $Leu8^+$ ）細胞数（Mean  $\pm$  S.D. : %） $21.45 \pm 9.49$ は、健常者群（ $n = 10$ ）のTi細胞数（ $32.24 \pm 8.10$ ）と比較して有意に低値であり（ $P < 0.01$ ）、一方、Tc（ $CD8^+$ ,  $CD11^+$ ）細胞数（ $29.49 \pm 12.12$ ）は健常者群（ $17.46 \pm 3.35$ ）に比べて高値であった（ $P < 0.01$ ）。漢方薬治療を行った年数に応じて4グループに分類し、その中の3年目を過ぎた患者群では、Ti細胞は次第に増加し、反対にTc細胞は次第に減少する傾向が認められた。同時に抗DNA抗体価も次第に正常範囲に近づいた（ $P < 0.05$ ）。さらに、SLEの活動期を示す患者数と活動性を示す陽性項目数は、漢方治療開始初期と比較して、顕著に減少した（ $P < 0.01$ ）。

【考察および結論】SLE患者に対して漢方薬（主に滋陰降火湯）を長期投与した結果を見ると、Ti、Tc細胞数および抗DNA抗体価が次第に健常者群の値に近づいてくる傾向がある。なかでも特にTi細胞は、 $11.72 \pm 6.93$ から $22.88 \pm 7.90$ に増加しており（ $P < 0.05$ ）、Ti細胞の中のTsi（Suppressor/Inducer）細胞が、抗DNA抗体価の変化にかなり重要な働きをしていると推測される。以上のことから、漢方薬の長期投与には免疫調節作用があり、活動性のSLEを安定期に向わせたことが示唆された。